

関西菌類談話会会報

2000年12月 No. 23 (増刊号)



目 次

表紙 [ウスキキヌガサタケ]	山手万知子	1
キアミズキンタケに出会う— <i>Simblum periphragmoides</i> Klotzsch—	吉見 昭一	2
キアミズキンタケと同属コナガエノアカゴタケ (<i>Simblum sphaerocephalum</i> Schlechtendal) と出会う	吉見 昭一	3
ハラタケ (<i>Agaricus campestris</i> L.: Fr.) の栽培	奥沢 康正	4
第10回きのご展開く ようこそ「きのこの世界」へ		6
胞子紋カードを作ろう	丸山健一郎	8
第7回きのご展—きのことあそぼう—		9
街中でヤナギマツタケを発見	西尾公美子	12
仲村真氏より関西菌類談話会に寄贈された雑誌類の目録	事務局	13
1998年度活動の記録		15
表紙によせて, 編集後記など	編集委員会	20

キアミズキンタケに出会う —*Simblum periphragmoides* Klotzsch—

吉 見 昭 一

キノコを追いかけてたり、追いかけられたりして、今日という日が過ぎていく。時にべそかいたり、こみ上げてくる嬉しさで笑えてしまったりして、人生という道も教えてくれている。振り返って見ると、多くの希菌に出合っている。

希菌の1つ、キアミズキンタケ。1991年10月、写真家の伊沢正名さんから『石垣島でキアミズキンタケを見つけました。標本があるのでしたら送ります。』と、連絡をいただいた。驚ろいた。驚ろいただけでない。以前から日本にあるかも知れないと思っていたからだ。川村清一、原色日本菌類図鑑の記述や小林義雄、大日本植物誌、ヒメノガスター亜目及スッポンタケ亜目の中に Petch の写真絵があり、台湾にあるとのことであった。もうすでに2回、石垣島に調べに行き、米原八重山のヤシ林に足を踏み入れているが見つからないで、京都に帰った。西表島も行った。空振りだった。台湾では蔴竹の下の地上に発生するとある。伊沢さんの詳しい書簡(1991.10.28)が来て、発生場所はヤシ林の立札の所から入って左手である。雨のあとが発生好条件である。梅雨期はすでに調べた。豪雨のあとにしよう。台風と同時であれば出会えるかも知れない。1992年9月21日に那覇に入り、台風19号とぶつかるかも知れないが石垣島へ飛ぶ。機内は2人だけ、風が舞い流れてはゆれる。漸く、無事到着。緊張で肩がすくんでいた。豪雨と暴風の中、八重山高農の渡辺賢一先生に同乗して、ヤシ林へ走った。合羽をかぶって探索。薄暗い林内の倒木や落葉を掻く。3回往復したが、見つからない。だんだん疲れ、歩くのがやっとで林内を出る。今回も運のない探索とあきらめた。風雨が急に止み、青空さえ見える。台風が目に入った。きのこ発生の多いウガン岬へ回ることにした。

こうしてきのこ採集をしていた所、後ろの方で頓狂な妻の声で驚いて走っていった。指をさしている。そこに幻と思ったキアミズキンタケが立っている。成菌と幼菌である。樹林は雑木林で道端である。イヌビワがある。水がまだ道に流れてい

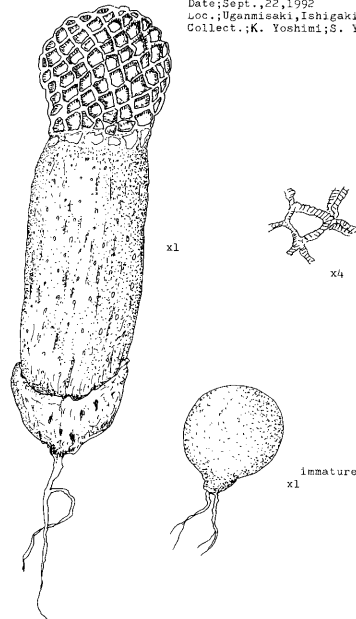
る。顔を近づけると果物の腐敗臭とでも言うのか変な匂いがツンとした。そう不快臭でなく、少し甘味のある匂いであった。

希菌キアミズキンタケを持って宿につくや豪雨と暴風が再来した。ガラスを叩きつける風雨を聞きながら描いたが、途中で落雷、停電を繰返して絵を書いた。

思いもしなかった今回の幸運に感謝した。

キアミズキンタケは腹菌類、スッポンタケ目、アカカゴタケ科で、アカカゴタケ科は箆型(アカカゴタケ属、カゴタケ属、キアミズキンタケ属)とアーチ型(カニノツメ属、イカタケ属、ツマミタケ属、サンコタケ属)があり、それぞれ、柄の有無で種を分けるが、キアミズキンタケ属は有柄である。属名 *Simblum* は *Simblos* (蜜蜂の巣)、種小名 *periphragmoides* は *Peri*(ぐるり)、*phragma* (隔壁)、*oides* (のよな) となる。小林義雄氏は頭部が黄色の網のような頭巾ということから和

NO.8128 *Simblum periphragmoides* Klotzsch Jap.Name: Kiamizukintake
Date: Sept., 22, 1992
Loc.: Ugamiisaki, Ishigaki, Okinawa Pref.
Collect.: K. Yoshimi; S. Yoshimi



名をつけたと思われる。

世界で、最初、南印度洋にあるマリチユース島で発見された C. G. Lloyd は、Phalloid で述べている。なお、印度、スリランカ、ジャワ、台湾；アフリカにて発見されるが、希菌で分布は詳細がわからない。また、種の同定も必ずしも明らかでない。知見したこの種に同義語は 7 種で、黄色と赤色に大別し、

① *S. periphragmoides* = *S. gracile* = *S. texense* と、
② *S. sphaerocephalum* = *S. clathratum* = *S. claitroides* となり、*S. miilleri* は頭形の網目が少なく数個を作る *Colus* 属（カウンタケ属）に入るものと見られる。*Simblum* 属は 2 種であろうと考える。

種の検索

1. 柄は黄色～淡黄色、籠状の頭部は橙黄色～黄色、網目数は 60 以上

キアミズキンタケ (*S. periphragmoides*)

1' 柄は鮮紅色～淡紅色、籠状の頭部は紅色で、柄の太さに比して拡張して大きい。網目数は 30 以下

コナガエノアカカゴタケ

(*S. sphaerocephalum*)

キアミズキンタケは頭部を入れて高さ 15 cm 外で、頭部は 5 cm、柄部 10 cm で、頭部わずか太

まり、径 4.5～5 cm、柄部の太さ 4～4.5 cm 頭部籠目は 7 段になっていて、1 段目 18 個、2 段目 19 個、3 段目 16 個、4 段目 11 個、5 段目 8 個、6 段目 6 個、7 段目（最上段）3 個で、合計 81 個の網目前後である。Penzig によると網目数は 98～124 個あるというが若干の上下数があるようである。網目は多く菱形網目から五角形網目で、網目のひも（托枝）に横皺があり、内側に緑黒色～黒色の孢子粘液（グレバ）が付着して、古くなった果物臭（弱い匂い）がある。籠形部のひもは横切断すると 1 本の管が通っているのみで複合管でない。柄部の上段、中段、下段は 1 層とわずかの層と 2 層の泡沫組織で伸びていて、中空である。基部に太い根状菌糸束が長く伸びる。袋（つぼ）は浅く、ゼラチンが残る。頭部籠形部の網目状ひもの横しわは子実層を形成し担子器を出す。20～22×3～4 μm、胞子は 3～3.5×1～1.5 μm、無色に近い。

（Petch は胞子は 4～6×2 μm とあるので、やや小形）（また、臭いについては酸っぱくなった糊に似た臭気とある。）

暴風雨と対峙し、得難い希菌と出会ったのは千載一遇のことであった。

（自宅：〒606-8283 京都市左京区北白川仕伏町 9-6 075-791-6463）

キアミズキンタケと同属コナガエノアカカゴタケ (*Simblum sphaerocephalum Schlechtendal*) と出会う

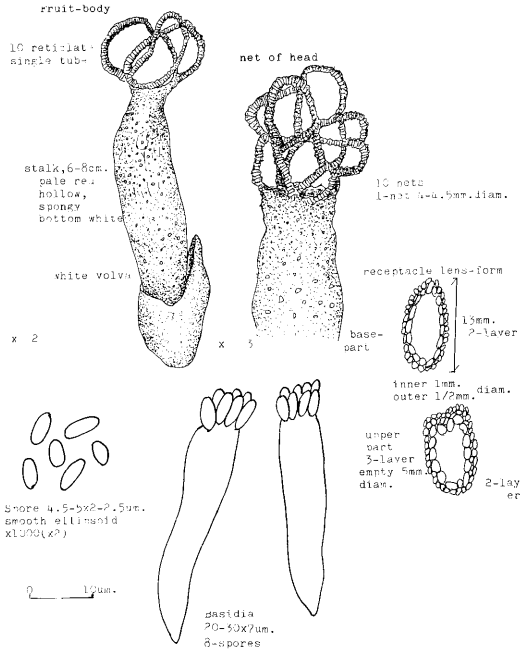
吉 見 昭 一

希菌キアミズキンタケと出会う幸運を喜んだ次ぎの年、1993年にさらに世界の希菌コナガエノアカカゴタケ (*Simblum sphaerocephalum*) と出会う機会に恵まれた。

飯塚茂明さん私信 1 信『今年（註 1993 年）6 月末、千葉県富津市の新舞子海岸にて奇妙なキノコを見つけました。砂地を掘った際に偶然出てきた物で、当時幼菌だったので割った所、どの書物にも載っていない種に思えたので、7 月に再度同じ場所に訪れた結果、写真のようなものを十数個確認しました。』と発見現場の図を添えた、写真を

受取り、驚いて見ました。川村清一は中国、大連市外、星ヶ浦公園で藤田謹次氏の唯一の標本及び粗画を修正されて、*Simbulum clathroides Kawamura* とし、ナガエノアカカゴタケと和名をつけられた。柄上部が有稜であることや頭部の網目が 30 個以上もあることから別種のようなのであるが、発生条件によって、これまで変化するのかも知れないので保留して C. G. Lloyd 文献などから、写真照合して、日本新産種ではないが、川村氏のいうナガエノアカカゴタケより小さく、頭部は粗雑で網目が大きい *S. sphaerocephalum* にあたると考えた。

NO. 3607 *Stereum sphaerocephalum* Schlechtendal
 Jpn. name: *Sphaerocarpus karotike* (Mats.) July, 21, 1993 and Oct., 2, 1993
 Loc.: Senuki-sea-side, Tatsutsumi-city Collect.: Shigeaki Itzuka



第2信『日本での発生確認は私が初めてとの事で大変驚きました。8月8日1本だけ見つかりました。それを掘り出した際、菌糸が砂中の朽木や木質化した枯れ草に絡みついているのが見られました。……』と発生したことがわかり、同所に発生した10月2日第3信と宅急便で幼菌大2個小2個を送付いただき、追培発生（自宅で成功）。希菌コナガエノアカカゴタケ (*S. sphaerocephalum*) であることを確認することができた。

第3信『Aの網目は13個、Bは12個、Cは19個あり、8月8日の採取は10個、10月2日は11個、10月17日は14個で10個～19個、平均約13個となります。全長で約8cmです。』と観察記録をいただいた。また、発生地については『埋れ木が砂中にあるようです。(写真6)……夏も秋もほぼ同じ場所で……』とある。種小名は *sphaero* (球状の) + *cephalum* (頭部) = 球状をした頭部の意味。

子実体は全長5～10cm前後、頭部籠型、柄部円筒部基部つぼの各部に分かれる。頭部は柄部と続く。柄に比して大きく、径2cm前後、網目約5～13個、赤色から濃赤色、横皺ひもで単管、4角形～5角形の網目で、内側に黒色～黒褐色の胞子粘液をつける。僅か悪臭がある。柄部は長さ3～6cm、太さ1～1.5cmで、上部は赤色から淡紅色、下部は白色、表面に泡沫状孔口があり、中空で2～3層（内層1mm、外層0.5mm）、つぼ白色で浅い。担子器は20～30×7μmで8担子坐生し、胞子は平滑、だ円形で、4.5～5×2～2.5μm、無色。

この種に関しては希菌で報告数がきわめて少ない。本多澄夫さんが2000年、再び愛知県海岸で発見している。

〔文献〕C. G. Lloyd; 1909, Phalloid : Yoshio Kobayasi; 1938, Nova Flora Japonica, Hymenogastriaceae et Phallineae : 川村清一; 1954, 原色日本菌類図鑑第6巻: W. C. Coker & J. N. Couch; 1928, The Gasteromycetes of the Eastern United States and Canada : Helen V. Smith & A. H. Smith; 1973, The Non-Grilled Fleshy Fungi

ハラタケ (*Agaricus campestris* L.: Fr.) の栽培

奥沢康正

ハラタケは田中延次郎氏が和名をつけている料理茸（リュウリタケ）の方言をもち、特に西洋では非常にすぐれた食用菌であることから洋菌（ヨウキン）、西洋キノコ、西洋マツタケ、セイヨウナバ等と言われています。欧米では古くから栽培されていたことからツクリタケ、トキナシダケの名がついたのでしょう。外国の俗名をそのまま

って、マッシュルーム、ジャンピニオン、ジャンピニアンは誰もが知っているなじみ深い外来語です。畑の肥料にまかれた馬糞から自然発生していることからハタケキノコ、ムギカラタケ（千葉県）、ウマノクソキノコ、マノクソキノコ、バフンタケ、マグソタケの名を持っています。

私は5月頃美山町弓削の畑に大発生したのを見

ています。その他成菌の傘のウラの色調からクロスケ、クロツユ（いづれも秋田）等23の多くの方言、別名、一名を持っている温故知新のキノコです。

このハラタケの歴史を調べているうちに明治10年7月15日に発刊された「農業雑誌」第37号に、「キノコ培養新説」なる論文が載せられています。今回はこの文章を口語訳にして、すでに134年前にマッシュルームの栽培が有用で、農業振興策として広められた史実を見ます。

「キノコ培養新説」

『キノコは一種の植物ですが、実を結ぶこともなく、又、種（たね）もないものなので、いかにしてその種の物を伝えていくかは、目下アメリカの博学者といえども明らかにしていません。しかし近頃これを培養することを発明して以来、この業種に従事する人々は益々多くなり、今は農家の人々にとって有益な産業になっているとのこととです。

これを培養する方法は、簡単にできるもので、又、どんな種類のキノコでもうまくできるのです。しかし、同じ手数を費やして、同じキノコを培養するには、かなり決まった種類のキノコになってきます。そこでその種類の最もいいものは、シャンピニオンというものであって、これを第一とし

ます。

そもそもこの種類が栽培しやすい理由は、その風味が良いからです。又、実は松茸やシメジ、椎茸などと比べても非常に良く、今はようやくこれを培養する手順を伝え、培養する時期がきていると思われまふ。幸いにして私はこの頃、このシャンピニオンの種を若干得たので、これを实地に試験して、その成果の如何を見ようと欲しました。さらにかくの如き業種を着手することこそ実社会の利益を起し、農業を改新する一端になると考え、私は今ここに西洋農家のこれを培養している方法を述べて、いささかなりとも諸君に一読を供し、併せて諸君も早くこの様な有益な実験をされることを希望するところとあります。前述したように元々キノコは種がないものなので、これを培養するためには、かつてキノコが発生した場所に白くもやもやとして、あたかも髪のような物を含んだ所の土を採ってきて、そこに種を着けることであります。以下、種土と記するのは、皆この土を言っています。このように種土を数年経た後に、キノコがよく発生するという事は、有名なるヘンデルソン氏がすでに述べていることであります。

キノコ栽培方法は、近頃益々多くなり、栽培家はかえって迷うことになっていますが、私は今まで西洋において数回の経験をし、間違いなく良い成果を得た方法を述べてみます。

マッシュルームを多量に栽培するには、一個の小屋を必要としますが、もし、少しばかりを栽培するには、雨の害がない温室又は、既、植木小屋の影などの所の日光の余りあたらない場所で、常に華氏40度より60度（約4°C~16°C）くらいまでの温度の所がよいのです。

また種を着ける気候は、天氣が良くなく、常に湿りがちであれば、いつでも良く発生するものです。又色々なキノコも、自然に発生しているのは、必ず梅雨や秋の時候で、特に霧雨の甚だしいときに発生します。フランスでは毎年およそ9月より栽培に着手すると規定しています。又ヘンデルソンの説によれば、培養するには毎年12月の上旬より着手するのがよく、次の年の2月上旬の頃になると、新たな香りの良いマッシュルームを食べられ、さらにこれを市に持っていけば人は特に珍重し、実に栽培のために非常に多くの富を得るものであります。

これを栽培する土はその土と馬糞と、各々同じ割合で混合した養土を必要とします。そして又多



量の馬糞を得るのが非常によいのですが、一度に得難い場合には、徐々にこれを混合した後用いるのがよいのです。マッシュルームを生かすためには、この土の温度を高めないように、毎日一度ずつ、土を泡立てずき混ぜることが必要です。又、牧場あるいはかつて肥料を積み置いた場所の土は決して用いてはなりません。これらは皆、マグソタケ（食べられないキノコ）の種を含む恐れがあります。

このような堆肥ができあがったとき、これを利用して、およそ4～5尺の幅を作ります。（多く栽培したい場合は、手狭なる場所でもよく発生させるために、幅4尺、厚さ8寸の大きな蚕棚のような幾重にも重なった棚を作ります。）これに前の肥土、つまり馬糞を混合した土を入れ、木ぎれで5～6回硬く押し付け、ちょうど6寸5分の厚さとします。この厚さを越えると、そのために地中の熱が発生し、又薄いときは返ってマッシュルームを生長させることが難しくなるために、温度を誤らないように注意すべきであります。

このようにして、中央と思われる所へ寒暖計を埋めた後、一旦は華氏100度（約38℃）以上に上昇し、その後華氏90度～95度（約32℃～35℃）くらいに下がれば、この時はそのとがった木ぎれで一尺毎に床に半分の深さまで穴を開けて、その中へ卵の大きさになった種土を入れて、上を土で覆って正面を硬く押し付けておく必要があります。その後、十日あまりして種がようやく床一面に蔓延した時に、その上へ新しい黒い土を一樣に

散布しておきます。これで培養の準備は全て説明しました。この後は、ただ寒さや暑さの甚だしい温度にならないように注意することだけで、これを栽培する温度は平均華氏40度より華氏60度（約4℃～16℃）までであります。特に華氏60度（約16℃）を最も適温とします。又、華氏40度以下になるときは、床土が余り冷たくなるために、マッシュルームの生長がはなはだ遅くなり、ついにはその採集時期に遅れ、儲けを失うことがあります。』

と書かれてあります。これは現在のマッシュルームの作り方にやや似ていますが、日本では大正11年、京都（京都府紀伊郡堀内村）で初めて森本彦三郎氏が、このマッシュルームの人工栽培の生産に成功したことで有名です。それにしても明治10年に西洋から植物学が流入し、昔からの本草学から大きく脱却し始める時代でしたが、キノコ学についてはまだまだ情報の少なかった時代に、早くもマッシュルームの栽培に目を向けていた記事があったとは驚きです。マッシュルームの栽培は、実にこの情報から44年後に、やっと日本に日の目を見たこととなります。最近では、白いマッシュルームの他に、茶色い色をしたマッシュルームが市場で売られているのも、同じように人工栽培されていますが、やはりおいしいマッシュルームを発生させるにはどうしても馬糞が必要と聞いています。本当なのでしょう。

（連絡先：〒615-8085 京都市西京区桂千代原町72-13 奥沢眼科医院 075-391-7721）

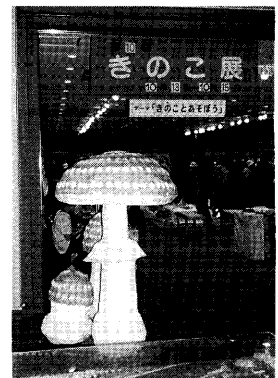
第10回きのこ展 ようこそ「きのこの世界」へ

京都植物園において、2000年10月13日（金）～15日（日）までの3日間、恒例のきのこ展が開催されました。毎年きのこ展を開くようになってから4年目、10回目のきのこ展でした。今年もテーマは「きのこことあそぼう」でした。

3日間を通じて見学者は約4,500名にのぼり、多くの人々にきのこへの関心を広めたきのこ展でした。

今回のメインの展示は冬虫夏草で、冬虫夏草の

ジオラマ、パネルで「冬虫夏草とは」、「冬虫夏草の生活史と利用」の展示および冬虫夏草標本の展示コーナーが設けられました。そして、植物園教室で行われた講演は杉山信夫氏





野生きのこの展示に見入る見学者



きのこにふれるコーナーに来た子供たち



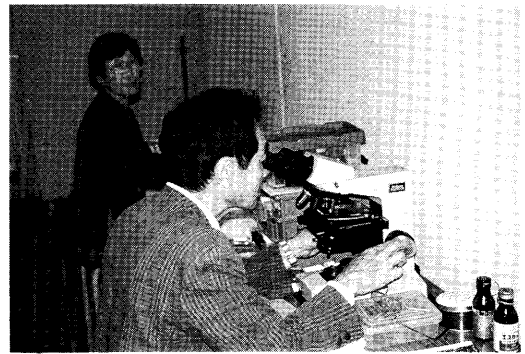
冬虫夏草の展示



販売コーナーの会員たち



関西の毒きのこの展示



顕微鏡の前の同定係

による「冬虫夏草のふしぎ」で、参加希望者が殺到する盛況でした。

恒例の展示となっている「関西の毒きのこ」では、今年はいじめてカエンタケ (*Podostroma cornu-damae*) が登場しました。尿が出なくなる、血圧低下、意識障害、ショック状態、脳障害、腎不全などの中毒で、食後3日後に亡くなった新潟県の男性の例が紹介され、中毒のむごさに驚きの声が上がっていました。

昨年好評であった「きのこにふれる」コーナー

は今年も大盛況で、大人も子供もきのこの絵を書いたり、印を作ったりと和気あいあいと楽しむ姿が見られました。

談話会の行くきのこ展の最大の特徴は生の野生きのこの展示にあります。多くの会員がきのこの展の日程を通じてきのこを採集し、展示会場に運びました。そのきのこの数は名前のわかったものだけでも236種にのぼりました。会場の裏舞台では、運ばれるきのこの山に悪戦苦闘する同定係の姿が見られました。

以上のほか、グッズやTシャツ、手ぬぐい、書籍の販売コーナー、受け付けやきのこの相談コーナー、写真作品展示コーナー等がありました。今年のTシャツは、会員の波部健さんがデザインしたデストロイングエンジェルの図柄のもの、上田俊穂さんデザインの日本手ぬぐいととも好評の

売れ行きでした。協力委員としてそれぞれの担当を受け持っていたいただいた方は50名以上にのぼりました。このようにたくさんの会員によって成功させたきのこ展を、新しい世紀にも引継ぎ、発展させて行きたいと思います。（文責、佐々木）

胞子紋カードを作ろう

丸山 健一郎

皆さんは胞子紋を採って見たことがあるでしょうか？

キノコの図鑑を見ていると胞子紋の採り方が書かれているものがあるので、やってみたことのある方も多いでしょう。

胞子紋を採るには、新鮮なキノコを用意し、柄を切り、傘の部分だけを紙の上に載せて、無風状態を作るためにお椀などを被せて、数時間放置します。飛び出した胞子が紙の上に堆積して模様ができます。これが胞子紋です。少々時間がかかるので面倒ですが、放射状の美しい模様ができると嬉しいものです。種類によって色合いが異なり、分類の手がかりになります。

私もキノコを見始めた当時にいくつかの種類で試して楽しんだことがあったのですが、キノコを見慣れてきた頃から、わざわざ胞子紋を作って見ることをしなくなっていました。

この秋、キノコについての勉強会と観察会の依頼があり、キノコの見分け方の基本について教材を作ることになりました。胞子紋の色が分類の基本にあることを再認識したので、これを何とか教材にしようと考えました。

いざ胞子紋の教材を作るとしても、そう都合良くいろいろなキノコの胞子紋が揃うわけではありません。少しずつ作り溜めていかないとだめです。できるだけいろいろな色合いの胞子紋を揃えたかったのですが、白色、黒色、焦げ茶色、さび茶色、黄土色、ピンク色、緑灰色など特徴のあるものを一通り揃えようと努力しました。自分で採集したのもやキノコの採集会に出席して採集品を分けても

らったりしてキノコを集め、胞子紋を作りました。

今回試した方法は、家庭用のラミネート加工装置を利用して、胞子紋を採った紙をカード化하는ものです。ホームセンターなどで最近よく売られているこの装置は、ハガキ大の加工ができるものが数千円までの予算で購入できます。また加工用のフィルムも1枚15円程度と比較的安価です。もちろん胞子紋カードを作るだけのために購入するのはもったいないので、他にも活用を考えて購入下さい。

胞子紋を採る紙はケント紙を用いました。キノコは成熟した状態のものを選び、柄を切り取ります。大きめの密閉できるタッパ容器（100円ショップで売っている）にケント紙を並べ、キノコの傘を並べます。傘が乾燥気味なら霧吹きなどで少し加湿してからフタをし、数時間から一晩放置してやります。うまくいけば、一度に数種類の胞子紋が得られます。こうして得られた胞子紋の付いた紙をよく乾燥させます（乾燥が不十分だとカビが生えてしまいます。ドライヤーで裏からあぶるのも一手です）。これをラミネートフィルムに挟んで、加工装置に通すと完成です。

胞子の堆積が多すぎると、紙との接着が弱くなりフィルムが浮いてきますが、それ以外は特に問題はないようです。ラミネート加工時に相当加熱されますが、変色した胞子紋はありませんでした。普通に保存してどのくらい退色せずに持つのが不明ですが、数年くらいは持つのではないかと思います。

紙の空いた部分に和名と学名、日時と場所を記

録しておけば、採集記録にもなります。ハガキ大で大きさを統一しておくほうが、整理には良いでしょう。

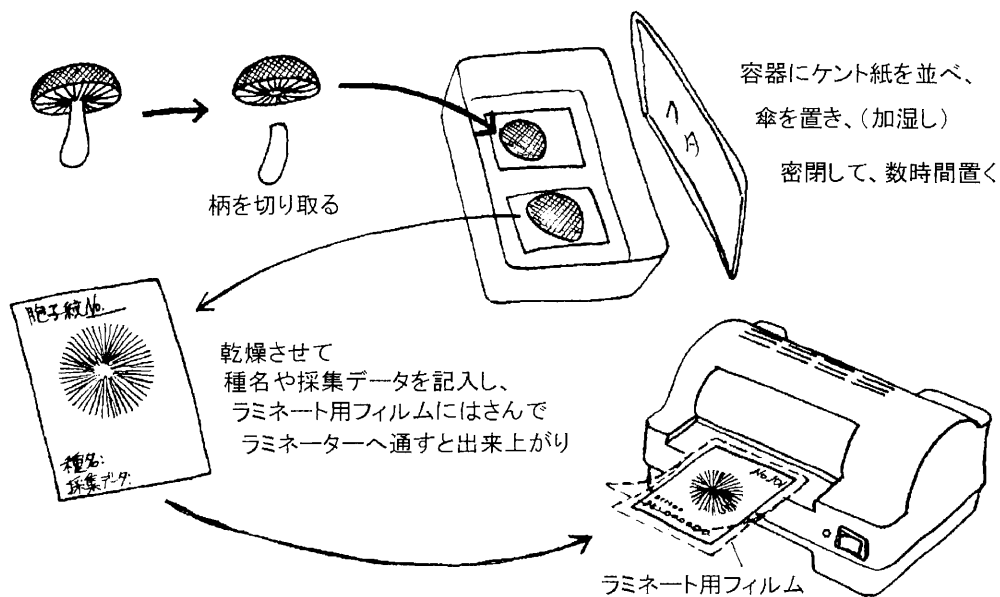
この胞子紋カード、観察会で皆さんに説明する際に提示して用いました。ラミネート加工してあ

るので、そのまま回覧していただきました。実物の胞子紋を比較して色の違いを見ていただけるので、教育効果はあったように思っています。

この胞子紋カードを皆さんも作ってみませんか？

<用意するもの>

- | | |
|---|-------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> キノコ（胞子の成熟したもの） | <input type="checkbox"/> ラミネート加工装置 |
| <input type="checkbox"/> ケント紙（ハガキ大に切る） | <input type="checkbox"/> ラミネート用フィルム |
| <input type="checkbox"/> 密閉できるタッパ容器、またはお椀 | <input type="checkbox"/> 筆記具 |



<参考文献>

- ・「検索入門 きのご図鑑」本郷次雄，上田俊穂，伊沢正名．保育社．
- ・「自然観察と生態シリーズ6 きのご・こけ・

しだ」井上浩，横山和正．小学館．

- ・「きのご実験マニュアル」善如寺厚，渡辺直明．講談社サイエンティフィック．
(自宅：〒639-0252 奈良県香芝市穴虫1204-3 07457-6-1966)

第7回きのご展—きのことあそぼう—

1997年10月17-19日の3日間、京都府立植物園で開催した。当会会員49名（延人数118名）が設営・展示・会場説明・相談・撤収などを手伝って盛況裡に終了した。入場者は3,908名で、遠く青森・大分・愛媛・石川から来られた方もあり連日

列をなして展示を見ていただいた。

展示では、野生きのご227種が集列、中でも栃木県、大山、芦生から送られた「ツキシタケの発光」コーナーは観衆が暗夜で発光するきのごに驚嘆の声が上がった。今年はじめて設営した「顕微

鏡」コーナーは、興味深くミクロの世界をのぞき込む人で列ができた。毒きのこ電気パネルも改良され、人工栽培によって食膳をにぎわすきのこ展示、きのこグッズ、またきのこ染めに見入る人々も多かった。また同時に行われた「きのこ染め」講習会も満席で整理券を出した。(吉見記)

第6回きのこ展 キノコ出品目録

<i>Agaricus abruptibulbus</i>	ウスキモリノカサ	<i>Clitocybe fragrans</i>	コカブイヌシメジ
<i>Agaricus arvensis</i>	シロオオハラタケ	<i>Collybia dryophila</i>	モリノカレバタケ
<i>Agaricus bisporus</i> var. <i>albidus</i>	ツクリタケ	<i>Collybia peronata</i>	ワサビカレバタケ
<i>Agaricus subrutilescens</i>	ザラエノハラタケ	<i>Collybia</i> sp.	モリノカレバタケ属
<i>Agrocybe cylindracea</i>	ヤナギマツタケ	<i>Coltricia cinnamomea</i>	ニッケイタケ
<i>Agrocybe erebia</i>	ツチナメコ	<i>Coprinus atramentarius</i>	ヒトヨタケ
<i>Albatrellus ovinus</i>	ニンギョウウタケモドキ	<i>Coprinus comatus</i>	ササクレヒトヨタケ
<i>Albatrellus yasudai</i>	ヌメリアイタケ	<i>Coprinus micaceus</i>	キララタケ
<i>Aleuria aurantia</i>	ヒイロチャワソウタケ	<i>Cordierites frondosa</i>	クロハナビラタケ
<i>Amanita abrupta</i>	タマンシロオニタケ	<i>Coriolum brevis</i>	ニクウスバタケ
<i>Amanita citrina</i> var. <i>citrina</i>	コタマゴテングタケ	<i>Coriolum hirsutum</i>	アラゲカワラタケ
<i>Amanita vaginata</i> var. <i>vaginata</i>	ツルタケ	<i>Coriolum versicolor</i>	カワラタケ
<i>Amanita virgineoides</i>	シロオニタケ	<i>Cortinarius bolaris</i>	アカツブフウセンタケ
<i>Amanita virosa</i>	ドクツルタケ	<i>Cortinarius bovinus</i>	サザナミツバフウセン
<i>Armillariella mellea</i>	ナラタケ	<i>Cortinarius purpurascens</i>	カワムラフウセンタケ
<i>Armillariella ostoya</i>	オニナラタケ	<i>Cortinarius</i> sp.	フウセンタケ属
<i>Aseroe arachnoidea</i>	イカタケ	<i>Cortinarius tenuipes</i>	ニセアブラシメジ
<i>Astraeus hygrometricus</i>	ツチグリ	<i>Cortinarius violaceus</i>	ムラサキフウセンタケ
<i>Auricularia polytricha</i>	アラゲキクラゲ	<i>Crepidotus badiofloccosus</i>	クリゲノチャヒラタケ
<i>Auriscalpium vulgare</i>	マツカサタケ	<i>Crepidotus mollis</i>	チャヒラタケ
<i>Baeospora myosura</i>	ニセマツカサシメジ	<i>Crucibulum leave</i>	ツネノチャガイゴケ
<i>Bisporella citrina</i>	ビョウウタケ	<i>Cyathus stercoreus</i>	ハタケチャダイゴケ
<i>Bovista plumbea</i>	シバフダンゴタケ	<i>Cyclomyces fuscus</i>	ワヒダタケ
<i>Bovista</i> sp.	シバフダンゴタケの一種	<i>Daedalea dickinsii</i>	ホウロクタケ
<i>Calostoma japonicum</i>	クチベニタケ	<i>Daedaleopsis purpurea</i>	ミイロアマタケ
<i>Calvaria cyathiformis</i>	スマレホコリタケ	<i>Daedaleopsis tricolor</i>	チャカイガラタケ
<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ	<i>Daldinia concentrica</i>	チャコブタケ
<i>Cantharellus luteocomus</i>	トキイロラッパタケ	<i>Dictyophora indusiata</i>	キヌガサタケ
<i>Cantharellus</i> sp.	アンズタケの一種	<i>Disciotis venosa</i>	カニタケ
<i>Ccantharellus cinereus</i>	アクイロウスタケ	<i>Elfvigia applanata</i>	コフキサルノコシカケ
<i>Chlorociboria aeruginosa</i>	ロクショウグサレキン	<i>Entoloma quadratus</i>	アカイボガサタケ
<i>Chroogomphus rutilus</i>	クギタケ	<i>Entoloma staurosporus</i>	ミイノモミウラモドキ
<i>Clavicornia pyxidata</i>	フサヒメホウキタケ	<i>Fistulina hepatica</i>	カンゾウタケ
<i>Clavulina amethystinoides</i>	ムラサキホウキタケモドキ	<i>Flammulina velutipes</i>	エノキタケ
<i>Clavulina rugosa</i>	カレエダタケモドキ	<i>Fomes fomentarius</i>	ツリガネタケ
<i>Clavulinopsis miyabeana</i>	ベニナギナタタケ	<i>Fomitopsis pinicola</i>	ツガサルノコシカケ
<i>Clitocybe acromelaga</i>	ドクササコ	<i>Galiella celebica</i>	オオゴムタケ
		<i>Ganoderma lucidum</i>	マンネンタケ
		<i>Ganoderma neo-japonicum</i>	マゴジャクシ
		<i>Geastrum triplex</i>	エリマキツチグリ
		<i>Geastrum fimbriatum</i>	シロツチガキ
		<i>Gloeophyllum sepiarium</i>	キカイガラタケ
		<i>Gomphidius roseus</i>	オウギタケ
		<i>Gomphus purpuraceus</i>	オオムラサキアンズタケ
		<i>Gymnopilus aeruginosus</i>	ミドリスギタケ
		<i>Gymnopilus liquiritiae</i>	チャツムタケ

<i>Gyromitra infula</i>	ヒグマアミガサタケ	<i>Lycoperdon spadiceum</i>	キホコリタケ
<i>Hebeloma crustuliniforme</i> f. <i>microspermum</i>	コツブオオワカフサタケ	<i>Lyophyllum decastes</i>	ハタケシメジ
<i>Helvella elastica</i>	アシボソノボリリュウ	<i>Lyophyllum fumosum</i>	ジャカシメジ
<i>Helvella macropus</i> var. <i>macropus</i>	ナガエノチャワンタケ	<i>Lyophyllum shimeji</i>	ホンシメジ
<i>Helvella</i> sp.	クロアシボソケノボリリュウタケ	<i>Lyophyllum sykosporum</i>	カクミノシメジ
<i>Hericium erinaceum</i>	ヤマブシタケ	<i>Macrolepiota</i> sp.	カラカサタケ属
<i>Heterobasidion insularis</i>	レンガタケ	<i>Marasmius</i> sp.	ホウライタケ属の一種
<i>Hydnum repandum</i>	カノシタ	<i>Melanogaster bromeians</i>	アカダマタケの一種
<i>Hygrocybe aurantia</i>	ヒメダイダイタケ	<i>Melanoleuca melaleuca</i>	コザラミノシメジ
<i>Hygrocybe conica</i>	アカヤマタケ	<i>Merulius tremellosus</i>	シワタケ
<i>Hygrocybe subcinnabarina</i>	ヤマヒガサタケ	<i>Mycena</i> sp.	サクラタケ属の一種
<i>Hygrophorus capreolarius</i>	ヒメサクランシメジ	<i>Naematoloma fasciculare</i>	ニガクリタケ
<i>Hypsizigus marmoreus</i>	ブナシメジ	<i>Naematoloma sublateritium</i>	クリタケ
<i>Ileodictyon gracile</i>	カゴタケ	<i>Oligoporus caesius</i>	アオゾメタケ
<i>Inocybe asterospora</i>	カブラアセタケ	<i>Oligoporus tephroleucus</i>	オシロイタケ
<i>Inonotus iudovicianus</i>	オニカワウソタケ	<i>Onnia vallata</i>	アズマタケ
<i>Inonotus mikadoi</i>	カワウソタケ	<i>Oudemansiella mucida</i>	スメリツバタケ
<i>Isaria takamizusanensis</i>	セミノハリセンボン	<i>Oudemansiella venosolamellata</i>	スメリツバタケモドキ
<i>Ischnoderma resinosum</i>	ヤニタケ	<i>Panellus serotinus</i>	ムキタケ
<i>Kobayasia nipponica</i>	シラタマタケ	<i>Paxillus cutisii</i>	サケバタケ
<i>Kuehneromyces mutabilis</i>	センボンイチメガサ	<i>Peziza echinospora</i>	トゲミノチャワンタケ
<i>Laccaria bicolor</i>	オオキツネタケ	<i>Phaeolepiota aurea</i>	コガネタケ
<i>Lactarius vellereus</i>	ケシロハツ	<i>Phallus impudicus</i>	スッポンタケ
<i>Lactarius aspideus</i>	ウスキチチタケ	<i>Phelinus xeranticus</i>	ダイダイタケ
<i>Lactarius chrysorrhoeus</i>	キチチタケ	<i>Phellinus gilvus</i>	ネンドタケ
<i>Lactarius gracilis</i>	アシボソチチタケ	<i>Phellinus robustus</i>	カシサルノコシカケ
<i>Lactarius hatsudake</i>	ハツタケ	<i>Phellinus</i> sp.	ネンドタケ属
<i>Lactarius laeticolorus</i>	アカモミタケ	<i>Phellodon niger</i>	クロハリタケ
<i>Lactarius quietus</i>	チュウジチチタケ	<i>Pholiota lubrica</i>	チャナメツムタケ
<i>Laetiporus versisporus</i>	ヒラフスベ	<i>Phyllotopsis nidulans</i>	キヒラタケ
<i>Lentinellus ursinus</i>	イタチナミハタケ	<i>Piptoporus betulinus</i>	カンバタケ
<i>Lentinus edodes</i>	シイタケ	<i>Pisolithus tinctorius</i>	コツブタケ
<i>Lenzites betulina</i>	カイガラタケ	<i>Pleurocybella porrigens</i>	スギヒラタケ
<i>Leotia lubrica</i> f. <i>lubrica</i>	ズキンタケ	<i>Pleurotus pulmonarius</i>	ウスヒラタケ
<i>Lepiota</i> sp.	ササクレキツネノカラカサ	<i>Podostroma cornu-damae</i>	カエントケ
<i>Lepista nuda</i>	ムラサキシメジ	<i>Polyporus alveolarius</i>	ハチノスタケ
<i>Lepista</i> sp.	ムラサキシメジの一種	<i>Polyporus badius</i>	アシングロタケ
<i>Linderia bicolumnata</i>	カニノツメ	<i>Polyporus brumalis</i>	オツネンタケモドキ
<i>Lycogala epidendrum</i>	マメホコリ	<i>Polyporus tuberaster</i>	タマチョレイタケ
<i>Lycoperdon molle</i>	ホコリタケ属の一種	<i>Psathyrella candolliana</i>	イタチタケ
<i>Lycoperdon perlatum</i>	キツネノチャブクロ	<i>Psathyrella gracilis</i>	ナヨタケ
<i>Lycoperdon perlatum</i> var. <i>nigrescens</i>	クロホコリタケ	<i>Psathyrella piluliformis</i>	ムササビタケ
<i>Lycoperdon pyriforme</i>	タスキノチャブクロ	<i>Psathyrella</i> sp.	ナヨタケ属
		<i>Psathyrella velutina</i>	ムジナタケ
		<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>	サンコタケ

<i>Pycnoporus coccineus</i>	ヒイロタケ	<i>Suillus laricinus</i>	シロスリイグチ
<i>Entoroma</i> sp.	イッポンシメジ属の一種	<i>Suillus luteus</i>	スメリイグチ
<i>Rozites caperata</i>	ショウケンジ	<i>Trametes gibbosa</i>	オオチリメンタケ
<i>Russula castanopsidis</i>	カレバハツ	<i>Trametes orientalis</i>	クジラタケ
<i>Russula compacta</i>	アカカバイロタケ	<i>Tremella foliacea</i>	ハナビラニカワタケ
<i>Russula emetica</i>	ドクベニタケ	<i>Trichaptum biforme</i>	ハカワラタケ
<i>Russula mariae</i>	ニオイコベニタケ	<i>Trichaptum fuscoviolaceum</i>	ウスバシハイタケ
<i>Sarcodon aspratus</i>	コウタケ	<i>Tricholoma auratum</i>	シモコシ
<i>Sarcodon imbricatus</i>	シシタケ	<i>Tricholoma caligatum</i>	オウシュウマツタケ
<i>Sarcodon scabrosus</i>	ケロウジ	<i>Tricholoma matsutake</i>	マツタケ
<i>Schizophyllum commune</i>	スエヒロタケ	<i>Tricholoma ponderosum</i>	アメリカマツタケ
<i>Scleroderma geaster</i>	ツチグリニセショウロ	<i>Tricholoma portentosum</i>	シモフリシメジ
<i>Scleroderma reae</i>	コニセショウロ	<i>Tricholoma saponaceum</i>	ミネシメジ
<i>Spathularia velutipes</i>	コゲエノヘラタケ	<i>Tricholoma terreum</i>	クマシメジ
<i>Stereopsis burtianum</i>	ハナウロコタケ	<i>Tricholoma ustale</i>	カキシメジ
<i>Strobilomyces</i> sp.	オニイグチ属の一種	<i>Tricholomopsis decora</i>	キサマツモドキ
<i>Strobilurus ohshimae</i>	スギエダタケ	<i>Tylophilus castaneiceps</i>	スメリニガイグチ
<i>Strobilurus stephanocystis</i>	マツカサキノコモドキ	<i>Xeromphalina campanella</i>	ヒメカバイロタケ
<i>Stropharia aeruginosa</i>	モエギタケ	<i>Xylaria magnolia</i>	ホソツクシタケ
<i>Stropharia rugosoannulata</i>	サケツバタケ	<i>Xylaria perisicaria</i>	フウノミタケ
<i>Suillus bovinus</i>	アミタケ	<i>Xylaria polymorpha</i>	マメザヤタケ
<i>Suillus granulatus</i>	チチアワタケ	<i>Xylaria tabacina</i>	ハマキタケ
<i>Suillus grevillei</i>	ハナニグチ		

街中でヤナギマツタケを発見

西尾 公美子

関西菌類談話会に入会してから、街中であろが、山を通る時であろうが、何かめずらしいきのこがはえてまいかと、興味をもって観察するようになった。

平成9年秋、五条から四条迄の加茂川ぞいの、花の回廊を歩いていると、柳の50年位たった古木が植わっていた。

古木の枝が2つに別れている所に、生きたきのこがぶらさがっている。

きのこがついている場所が高いので、表面は見えないが、裏はシイタケの裏のような横に線が整って出来た模様になっていて、薄いクリーム色をしていた。

なんてきれいな芸術作品がぶらさがっている。

感動でしばらく眺めていた。

あんなきのこ、見たことない。

初めてや、何という名前のきのこかな。

そや、会報を送って下さる、枚方市の下野さんに電話して聞いてみようと思い、電話すると、ヤナギマツタケという名前であることを教えてもらった。

名前が分っただけで、感謝でああ良かった、ありがとうございますという気持ちになる。

後日、あのヤナギマツタケって、随分大きなきのこだったが、あれ食べられるのだったのか、聞くのをわすれた。

しもたぁー。

そして1年後の11月、近所の野菜をわけて下さる奥さんが、口元にえみを浮かべて、新聞紙にくるんだ物を大事そうにかかえて我が家に持って来た。

「これ、私所の畑の近くに、大きな柳がある所にはえていたの、ヤナギマツタケというのよ。」

「私もこれ初めてで知らなかったのだけど、隣の畑のおじさんが、食べられるというので、家で食べたらいいしかったので、もう試食ずみなので大丈夫よ。」

「奥さん食べて。」ともって来て下さった。

見ると、丁度育ちもよく、食べ頃の傘はうっすらとしたねずみ色のヤナギマツタケ。

形もとてもよく、ぱちりと元気よく傘をはった、品評会にでも出せるような、立派なきのこを持って来て下さった。

十一時頃だったので、

「昼に食べや、みそ汁に入れて食べたらおいしかったよ。」と言って下さったので、新鮮なうちにといい、早速昼食にみそ汁に入れて食べると、こしっとしていてシイタケよりは淡泊な味でおいしかった。

手にかかえる位、沢山持って来て下さったので、昼、夜の二回、たっぷり満足するだけ頂いた。

きのこの名前を聞く縁が出来た事で、我が家に、本物のきのこが舞い込んで来たのです。

今年の1月27日、今度は花の回廊を四条から五条迄歩いていると、一年前に見た柳の木より小さな古木に、土から幹が出ていたので、

私がさわられる所に、手のひら位のヤナギマツタケがはえていて、誰れかが端々を手でつまかいてあり、一部ははぎ取られて横にそっとねかしてある。

きのこのなで、興味を示して手でもいであいをかいだり、中はどうなっているのかと、縦にさいて中を観察したのであろうが、食べられないと感じ、一部をそのまま横たえて置いてあったのであろう。

柳の木の上を見ると、一つはもう日が立って乾燥したきのこが一つ。少し上には生きたきのこが二枚、しっかりとついていた。

私はきのこを取る気にはならず、ただ、「よくはえて来てくれてありがとう、仲間をふやしてね。」とかすかな声で語って、柳の木を後にした。

京都市内の街中で、食べられるヤナギマツタケの発見のお知らせでした。

(自宅：〒611-0011 宇治市五ヶ庄北ノ庄22-18 0774-32-5173)

仲村真氏より関西菌類談話会に寄贈された雑誌類の目録

事務局より

1998年8月に本会会員の仲村真氏より下記の日本菌学会報、単行本、図鑑等が寄贈されました。会誌への掲載が遅れましたが、寄贈されました書物の目録を挙げさせていただきます。

寄贈を受けた中に、日本菌学会報の創刊号から1993年までほぼ全巻、現在では滅多に手に入らない川村清一氏の原色日本菌類図鑑全8巻、北アメリカのイグチ類の図鑑などの外国の図鑑、およびきのこの栽培に関する本等、貴重な資料が多く含まれています。

これらの書物は現在、関西菌類談話会の事務局に保存しておりますので、必要な方は事務局まで連絡下さい。お貸し致します。

最後に、長年集められました会報、図鑑等を本会に寄贈いただきました仲村真氏にお礼を申し上げます。有り難うございました。

1. 雑誌

日本菌学会報 1巻：1～10. 1956～1959.

日本菌学会報 2巻：1～10. 1959～1961.

日本菌学会報 3巻：1～6. 1962.

日本菌学会報 4巻：1～6. 1963, 1964.

日本菌学会報 5巻：1～3. 1964～1965.

日本菌学会報 6 卷 : 1 ~ 3 . 1965. Aug. 20 ~ 1965. Dec. 31.

日本菌学会報 7 卷 : 1 ~ 2 , 3 . 創立十周年記念号 1966. May. 1 ~ 1966. Dec. 1.

日本菌学会報 8 卷 : 1 ~ 2 . 1967.

日本菌学会報 9 卷 : 1 ~ 3 . 1968.

日本菌学会報 10 卷 : 1 ~ 3 . 1969.

日本菌学会報 11 卷 : 1 ~ 4 . 1970.

日本菌学会報 12 卷 : 1 ~ 4 . 1971.

日本菌学会報 13 卷 : 1 ~ 4 . 1972.

日本菌学会報 14 卷 : 1 ~ 4 . 1973.

日本菌学会報 15 卷 : 1 ~ 4 . 1974.

日本菌学会報 16 卷 : 1 ~ 4 . 1975.

日本菌学会報 17 卷 : 1 ~ 3 , 4 . 創立二十周年記念号 1976.

日本菌学会報 18 卷 : 1 ~ 4 . 1977.

日本菌学会報 19 卷 : 1 ~ 4 . 1978.

日本菌学会報 20 卷 : 1 ~ 4 . 1979.

日本菌学会報 21 卷 : 1 ~ 4 . (No. 2 なし) 1980.

日本菌学会報 22 卷 : 1 ~ 4 . 1981. 初版から第 17 巻の総目次

日本菌学会報 23 卷 : 1 ~ 4 . 1982.

日本菌学会報 24 卷 : 1 ~ 4 . 1983.

日本菌学会報 25 卷 : 1 ~ 4 . 1984.

日本菌学会報 26 卷 : 1 ~ 4 . (No. 2 なし) 1985. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 27 卷 : 1 ~ 4 . 1986. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 28 卷 : 1 ~ 4 . 1987. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 29 卷 : 1 ~ 4 . 1988. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 30 卷 : 1 ~ 4 . 1989. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 31 卷 : 1 ~ 4 . 1990. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 32 卷 : 1 ~ 4 . 1991. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 33 卷 : 1 ~ 4 . 1992. 日本菌学会ニュースを含む

日本菌学会報 34 卷 : 1 ~ 4 . 1993. 日本菌学会ニュースを含む

2. 図鑑等

The Encyclopedia of Mushrooms. Colin Dickinson and John Lucas. Orbis Publishing Ltd, London. 1979.

Mushrooms & Toadstools. A colour filed guide. U. Nonis . David & Charles Newton Abbot, London. 1981.

The Audubon Society Field Guide to North American Mushroom. Chanticleer Press. Gary H. Lincoff. Alfred A. Knopf, New York. 1981.

Hundboch für Pilzfrende IV. Michael · Hennig · Kreisel. VEB Gustar Fisher Verlag Jena. 1981.

Common British Fungi. Elsie M. Wakefield and R.W.G. Dennis. Saiga Publ. Co. Ltd. 1981.

A Field Guide to Mushrooms and These Relatives. Booth Courtenary, Harold H. Burdsall. VNR. 1982.

Mushrooms and Fungi (all colour book). Moira Sarovinus. Octopus Books. 1973.

The Boleti of Northeastern North America. W.H. Snell and Esther A. Dick. J. Cramer. 1970.

原色日本菌類図鑑. 川村清一著 全 8 巻
 茸類の研究. 応用菌叢学研究会 有明書房
 菌類研究法. 青島 椿 三浦 著 共立出版
 きこの年鑑. 1992年版 農村文化社
 きこの基礎科学と最近技術. 農村文化社
 最新応用菌叢学. 広江勇著 有明書房
 中国の薬用菌類. 劉波著 自然社刊
 改訂増補 日本菌類目録. 白井光太郎著 有明
 書房
 キノコ事典. 中村克哉編集 朝倉書店
 キノコ栽培. 大森清孝/庄司 当 共編 農村
 漁村文化社
 ヒラタケ/ナメコ/エノキタケ/人工栽培. 久
 宗社著 富民協会出版部
 山菜キノコハンドブック. 脇田正二他著 主婦
 の友社
 きこの狩りを楽しむ本. 城川四郎著 学研

1998年度 活動の記録

第357回例会 榎原神宮菌類観察会

日時：1998年7月5日（日）晴

53名参加

場所：奈良県榎原市榎原神宮境内

（シイ・カシ林）

今年の梅雨の前半は比較的雨量が多く、豊作が予想されたが、6月下旬から7月初旬にかけての観察会直前の雨量が、平年の10パーセント以下と非常に少なく、思ったほどきのこが採集できなかった。とくに林床が濡れるほどの激しい雨がなかったことが大きく影響した。

とはいっても、53名のあたま数のお陰で採集品のうち104種が同定でき、そのうち今回新たに観察されたのは24種であった。

観察品リスト

- | | | | |
|---|-------------|---------------------------------------|------------|
| 1 <i>Pleurotus ostreatus</i> | ヒラタケ | 24 <i>Inocybe asterospora</i> | カブラアセタケ |
| 2 <i>Lentinus lepideus</i> | マツオウジ | 25 <i>Gymnopilus spectabilis</i> | オオワライタケ |
| 3 <i>Laccaria vinaceoavellanea</i> | カレバキツネタケ | 26 <i>Entoloma</i> sp. | イッポンシメジ属 |
| 4 <i>Clitocybe</i> sp. | カヤタケ属 | 27 <i>Strobilomyces confusus</i> | オニイグチモドキ |
| 5 <i>Oudemansiella radicata</i> | ツエタケ | 28 <i>Strobilomyces seminudus</i> | コオニイグチ |
| 6 <i>Cyptotrama asprata</i> | ダイダイガサ | 29 <i>Boletellus emodensis</i> | キクバナイグチ |
| 7 <i>Amanita farinosa</i> | ヒメコナカブリツルタケ | 30 <i>Phylloporus bellus</i> | キヒダタケ |
| 8 <i>Amanita pantherina</i> | テングタケ | 31 <i>Xerocomus subtomentosus</i> | アワタケ |
| 9 <i>Amanita vaginata</i> var. <i>punctata</i> | オオツルタケ | 32 <i>Xerocomus</i> sp. | アワタケ属 |
| 10 <i>Amanita vaginata</i> var. <i>fulva</i> | カバイロツルタケ | 33 <i>Boletus reticulatus</i> | ヤマドリタケモドキ |
| 11 <i>Amanita hemibapha</i> subsp. <i>similis</i> | チャタマゴタケ | 34 <i>Boletus violaceofuscus</i> | ムラサキヤマドリタケ |
| 12 <i>Amanita longistriata</i> | タマゴテングタケモドキ | 35 <i>Boletus ornatipes</i> | キアミアシイグチ |
| 13 <i>Amanita sprata</i> | ツルタケダマン | 36 <i>Boletus fraternus</i> | コウジタケ |
| 14 <i>Amanita citrina</i> var. <i>citrina</i> | コタマゴテングタケ | 37 <i>Boletus pseudocalopus</i> | ニセアシベニイグチ |
| 15 <i>Amanita pseudoporphyria</i> | コテングタケモドキ | 38 <i>Boletus pulverulentus</i> | イロガワリ |
| 16 <i>Amanita volvata</i> | フクロツルタケ | 39 <i>Boletus umbriniporus</i> | コゲチャイロガワリ |
| 17 <i>Amanita rubescens</i> | ガンタケ | 40 <i>Tylopilus nigropurpureus</i> | クロニガイグチ |
| 18 <i>Amanita spissacea</i> | ヘビキノコモドキ | 41 <i>Tylopilus vinosobrunneus</i> | ブドウニガイグチ |
| 19 <i>Amanita exelsa</i> | キリンタケ | 42 <i>Tylopilus ferrugineus</i> | チャニガイグチ |
| 20 <i>Agaricus</i> sp. | ハラタケ属 | 43 <i>Tylopilus fumosipes</i> | アイズメクロイグチ |
| 21 <i>Psathyrella candolliana</i> | イタチタケ | 44 <i>Leccinum extremiorientale</i> | アカヤマドリ |
| 22 <i>Psathyrella</i> sp. | イタチタケ近縁種 | 45 <i>Russula japonica</i> | シロハツモドキ |
| 23 <i>Agrocybe cylindracea</i> | ヤナギマツタケ | 46 <i>Russula nigricans</i> | クロハツ |
| | | 47 <i>Russula densifolia</i> | クロハツモドキ |
| | | 48 <i>Russula compacta</i> | アカカバイロタケ |
| | | 49 <i>Russula foetens</i> | クサハツ |
| | | 50 <i>Russula laurocerasi</i> | クサハツモドキ |
| | | 51 <i>Russula pectinatoides</i> | クシノハタケモドキ |
| | | 52 <i>Russula sororia</i> | キチャハツ |
| | | 53 <i>Russula cyanoxantha</i> | カワリハツ |
| | | 54 <i>Russula vesca</i> | チギレハツタケ |
| | | 55 <i>Russula mariae</i> | ニオイコベニタケ |
| | | 56 <i>Russula amoena</i> | ムラサキカスリタケ |
| | | 57 <i>Russula viridi-rubrolimbata</i> | フタイロベニタケ |
| | | 58 <i>Russula alboareolata</i> | ヒビワレシロハツ |
| | | 59 <i>Russula castanopsidis</i> | カレバハツ |
| | | 60 <i>Russula lilacea</i> | ウスムラサキハツ |
| | | 61 <i>Lactarius</i> sp. | チチタケ属 |
| | | 62 <i>Cantharellus</i> sp. | アンズタケ近縁種 |
| | | 63 <i>Cantharellus</i> sp. | アンズタケ属 |
| | | 64 <i>Stereum ostrea</i> | チャウロコタケ |
| | | 65 <i>Xylobolus spectabilis</i> | モミジウロコタケ |

66	<i>Sparassis crispa</i>	ハナビラタケ
67	<i>Polyporus tuberaster</i>	タマチヨレイタケ
68	<i>Polyporus alveolarius</i>	ハチノスタケ
69	<i>Polyporus arcularius</i>	アミスギタケ
70	<i>Polyporus badius</i>	アシグロタケ
71	<i>Polyporus varius</i>	キアシグロタケ
72	<i>Microporus subaffinis</i>	ツヤウチワタケモドキ
73	<i>Tyromyces incarnatus</i>	アケボノオシロイタケ
74	<i>Oligoporus tephroleucus</i>	オシロイタケ
75	<i>Phaeolus schweinitzii</i>	カイメンタケ
76	<i>Coltricia cinnamome</i>	ニッケイタケ
77	<i>Coltriciella pusilla</i>	ヒメオツネンタケ
78	<i>Cyclomyces tabacinus</i>	キヌハダタケ
79	<i>Daedalea dickinsii</i>	ホウロクタケ
80	<i>Trametes versicolor</i>	カワラタケ
81	<i>Trichaptum bifforme</i>	ハカワラタケ
82	<i>Perenniporia ochroleuca</i>	ウズラタケ
83	<i>Loweoporus tephroporus</i>	シイサルノコシカケ
84	<i>Ganoderma lucidum</i>	マンネンタケ
85	<i>Ganoderma applanatum</i>	コフキサルノコシカケ
86	<i>Inonotus</i> sp. (<i>Onnia vallata</i>)	アズマタケ
87	<i>Phellinus igniarius</i>	キコブタケ
88	<i>Scleroderma</i> sp.	ヒメカタショウロ近縁種
89	<i>Pisolithus tinctorius</i>	コツブタケ
90	<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
91	<i>Lycoperdon</i> sp.	ホコリタケ属
92	<i>Auricularia polytricha</i>	アラゲキクラゲ
93	<i>Dicephalospora rufocornea</i>	ニセキンカクアカビョウタケ
94	<i>Trichoglossum farlowi</i>	テングノシャモジタケ
95	<i>Xylaria persicaria</i>	フウノミタケ
96	<i>Xylaria polymorpha</i>	マメザヤタケ
97	<i>Xylaria hypoxylon</i>	カノツノタケ
98	<i>Cordyceps sobolifera</i>	セミタケ
99	<i>Cordyceps formicarum</i>	マルミノアリタケ
100	<i>Tilachlidiopsis nigra</i>	オサムシタケ
101	<i>Isaria atypicola</i>	クモタケ
102	<i>Hypomyces</i> sp.	タケリタケ

第358回例会 宇治大吉山観察会

日 時：1998年7月19日（日）晴
 名簿記載者数44名（内非会員＝8名）

梅雨末期に適度の降雨もあり期待された観察会であったが、今年は例年よりきのこの発生が早く

個体数に比べ種数は多くなかった。

米国の Miss Cothie Aime（滋賀大横山研究室に来日）の参加もあり、京都初産のキツネハツ（新称）が採集されるなどそれぞれ思いの標本を手中に宇治の半日を過ごした。

例年採集種を大阪市立自然史博物館へ寄託するてはずは整理が追い付かないとの申し入れで今回は中止。（杉山信夫）

観察品リスト

1	<i>Lentinus lepideus</i>	マツオウジ
2	<i>Armillariella tabescens</i>	ナラタケモドキ
3	<i>Laccaria vinaceoavellanea</i>	カレバキツネタケ
4	<i>Oudemansiella radicata</i>	ツエタケ
5	<i>Xeromphalia campanella</i>	ヒメカバイロタケ
6	<i>Cyptotrama asprata</i>	ダイダイガサ
7	<i>Amanita vaginata</i> var. <i>vaginata</i>	ツルタケ
8	<i>Amanita rufoferruginea</i>	カバイロコナテングタケ
9	<i>Amanita sychnopyraxis</i> f. <i>subannulata</i>	テングタケダマシ
10	<i>Amanita pseudoporphyria</i>	コテングタケモドキ
11	<i>Amanita fuliginea</i>	クロタマゴテングタケ
12	<i>Amanita citrina</i> var. <i>gisea</i>	クロコタマゴテングタケ
13	<i>Amanita citrina</i> var. <i>citrina</i>	コタマゴテングタケ
14	<i>Amanita virosa</i>	ドクツルタケ
15	<i>Amanita volvata</i>	フクロツルタケ
16	<i>Amanita virgineoides</i>	シロオニタケ
17	<i>Amanita perpastia</i>	オニテングタケ
18	<i>Amanita</i> sp.	テングタケ属の1種
19	<i>Agaricus</i> sp.	ハラタケ属
20	<i>Psathyrella candolliana</i>	イタチタケ
21	<i>Inocybe lutea</i>	キイロアセタケ
22	<i>Inocybe asterospora</i>	カブラアセタケ
23	<i>Cortinarius bolaris</i>	アカツブフウセンタケ
24	<i>Entoloma hirtipes</i>	ミノモミウラモドキ
25	<i>Entoloma murrarii</i>	キイボガサタケ
26	<i>Paxillus atrotomentosus</i>	ニワタケ
27	<i>Paxillus curtisii</i>	サケバタケ
28	<i>Phylloporus bellus</i>	キヒダタケ
29	<i>Xerocomus nigromaculatus</i>	クロアザアワタケ
30	<i>Pulveroboletus auriflammeus</i>	ハナガサイグチ
31	<i>Boletus ornatipes</i>	キアミアシグチ
32	<i>Boletus pseudocalopus</i>	ニセアンベニグチ

33	<i>Boletus laetissimus</i>	ダイダイイグチ	79	<i>Fomitopsis pinicola</i>	ツガサルノコシカケ
34	<i>Tylopilus ballouii</i>	キニガイグチ	80	<i>Cylomyces fuscus</i>	ワヒダタケ
35	<i>Tylopilus castaneiceps</i>	スメリニガイグチ	81	<i>Onia vallata</i>	アズマタケ
36	<i>Tylopilus valens</i>	ホオベニシロアシイグチ	82	<i>Astraeus hygrometricus</i>	ツチグリ
37	<i>Strobilomyces strobiliaceus</i>	オニイグチ	83	<i>Scleroderma</i> sp.	ニセシヨウロの1種
38	<i>Austroboletus fusisporus</i>	ヤシャイグチ	84	<i>Kobayasia nipponica</i>	シラタマタケ
39	<i>Austroboletus gracilis</i>	クリカワヤシャイグチ	85	<i>Tremella izuensis</i>	トレメラ・イズエンシス
40	<i>Boletellus emodensis</i>	キクバナイグチ	86	<i>Auricularia polytricha</i>	アラゲキクラゲ
41	<i>Russula eburneoareolata</i>	ツギハギハツ	87	<i>Dacrymyces</i> sp.	アカキクラゲ属の1種
42	<i>Boletellus elatus</i>	アシナガイグチ	88	<i>Bisporella citrina</i>	ビョウタケ
43	<i>Heimiella japonica</i>	ベニイグチ	89	<i>Cordyceps militaris</i>	サナギタケ
44	<i>Russula japonica</i>	シロハツモドキ	90	<i>Paecilomyces japonica</i>	ハナサナギタケ
45	<i>Russula subnigricans</i>	ニセクロハツ	91	<i>Nomuraea atypicola</i>	クモタケ
46	<i>Russula densifolia</i>	クロハツモドキ	92	<i>Lycogala epidendrum</i>	マメホコリ
47	<i>Russula earlei</i>	キツネハツ (新称)			
48	<i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ			
49	<i>Russula vesca?</i>	チギレハツタケ?			
50	<i>Russula vesca</i>	チギレハツタケ			
51	<i>Russula mariae</i>	ニオイコベニタケ			
52	<i>Russula flavida</i>	ウコンハツ			
53	<i>Russula castanopsidis</i>	カレバハツ			
54	<i>Russula viridirubrolimbata</i>	フタイロベニタケ			
55	<i>Russula atropurpurea</i>	ウスムラサキハツ			
56	<i>Russula rosacea</i>	ヤブレベニタケ			
57	<i>Lactarius piperatus</i>	ツチカブリ			
58	<i>Lactarius volemus</i>	チチタケ			
59	<i>Lactarius corrugis</i>	チリメンチチタケ			
60	<i>Lactarius gerardii</i>	クロチチダマン			
61	<i>Lactarius scrobiculatus</i>	キカラハツタケ			
62	<i>Cantharellus cibarius</i>	アンズタケ			
63	<i>Cantharellus</i> sp.	アンズタケの1種			
64	<i>Cantharellus cinnabarinus</i>	ベニウスタケ			
65	<i>Clavulinopsis miyabeana</i>	ベニナギナタタケ			
66	<i>Stereum ostres</i>	チャウロコタケ			
67	<i>Stereum gausapatum</i>	チウロコタケ			
68	<i>Thelephora aurantiotincta</i>	ボタンイボタケ			
69	<i>Polyporus alveolaris</i>	ハチノスタケ			
70	<i>Polyporellus badius</i>	アングロタケ			
71	<i>Microporus subaffinis</i>	ツヤウチワタケモドキ			
72	<i>Microporus flabelliformis</i>	ウチワタケ			
73	<i>Laetiporus versisporus</i>	ヒラフスベ			
74	<i>Coltricia cinnamomea</i>	ニツケイタケ			
75	<i>Trametes versicolor</i>	カワラタケ			
76	<i>Trichaptum biforme</i>	ハカワラタケ			
77	<i>Truncospora ochroleuca</i>	ウズラタケ			
78	<i>Daedaleopsis tricolor</i>	チャカイガラタケ			

第360回例会 宝塚(中山寺)自然休養林 観察会

日時：1998年9月27日(日) 曇後雨
32名参加

98年は年初めから例年より10日程季節が先行している様子でしたが、梅雨明けは記録上最も遅れました。京阪神地域の8月は連日猛暑に熱帯夜、でも秋近しを感じる蟬の『ツクツクボウシ』の声は例年より2週間も早く耳にしました。神戸近郊の9月降雨量は平年の13%、雨を渴望していたら台風8号と7号の来襲で雨に恵まれ、その後秋雨前線の停滞で連日降ったり止んだり、然し気温が一向に低下しない。8月下旬に多く発生していましたが、例会当日は上記の如き状況でした、2年続きの低調。人間が予め設定した都合のよい日に自然は容易に応じてはくれない、年間を通じた継続調査をしまして最適の観察時季のデータを得るべきと痛感しています。

同定中に雨が降りだしたにも拘らず、ご参加の皆様方熱心にご協力を頂き有難うございました。
(池田晴美)

観察品リスト

1	<i>Lentinus lepideus</i>	マツオウジ
2	<i>Armillariella tabescens</i>	ナラタケモドキ
3	<i>Collybia dryophila</i>	モリノカレバタケ
4	<i>Collybia peronata</i>	ワサビカレバタケ
5	<i>Collybia peronata</i> (yellowtype)	ワサビカレバタケ (黄色型)
6	<i>Collybia confluens</i>	アマタケ

7 *Marasmiellus nigripes?*

アシグロホウライタケ?

8 *Oudemansiella pudens* ビロードツエタケ

9 *Marasmius pulcherripes* ハナオチバタケ

10 *Crinipellis* sp. ニセホウライタケ近縁種

11 *Baeospora myosura* ニセマツカサシメジ

12 *Amanita abrupta* タマシロオニタケ

13 *Leucoagaricus rubrotinctus?* アカキツネガサ?

14 *Leucocoprinus fragilissimus* キツネノハナガサ

15 *Leucocoprinus otsuensis?*

マルミノヒガサタケ?

16 *Agaricus praeclaresquamosus*

ナカグロモリノカサ

17 *Lepiota fusciceps* クロヒメカラカサタケ

18 *Clitopilus prunulus* ヒカゲウラベニタケ

19 *Boletellus russellii* セイタカイグチ

20 *Russula* sp. ベニタケ属

21 *Ramariopsis crocea* アカヒメホウキタケ

22 *Ramaria* sp. ホウキタケ属

23 *Stereum gausapatum* チウロコタケ

24 *Xylobolus spectabilis* モミジウロコタケ

25 *Thelephora multipartita* キブリイボタケ

26 *Cryptoporus volvatus* ヒトクチタケ

27 *Spongiporus lacteus* オオオシロイタケ

28 *Pycnoporus coccineus* ヒイロタケ

29 *Trametes versicolor* カワラタケ

30 *Coriolus brevis* ニクウスバタケ

31 *Lenzites betulnus* カイガラタケ

32 *Trichaptum bifforme* ハカワラタケ

33 *Truncospora ochroleuca* ウズラタケ

34 *Fomitopsis pinicola* ツガサルノコシカケ

35 *Punctularia strigosozonata* ケシワウロコタケ

36 *Guepinia spatularia* ツノマタタケ

37 *Calostoma japonicum* クチベニタケ

38 *Calvatia craniiformis* ノウタケ

39 *Cordierites frondosa* クロハナビラタケ

40 *Cblorociboria aeruginascens*

ロクショウグサレキンモドキ

41 *Bisporella citrina* ビョウタケ

42 *Helvella acetabulum* ウラスジチャワンタケ

43 *Daldinia concentrica* チャコブタケ

第362回例会 京都宝が池観察会

日時: 1998年10月17日 (土) 大雨

(台風10号接近)

10名参加

昨日からの激しい雨は朝になっても勢いが治まらず、宝が池の周辺でも土砂崩れが発生し、一部の道路が通行禁止になるなど、危険な状況の中での観察会でしたが、きのこにとりつかれた? 精鋭が集い、短い採集時間ながら立派なタマシロオニタケや大量のカキシメジに食べ頃のシャカシメジが二株! 珍しいオオノウタケやケシヨウシロハツも採集でき、「真田十勇士」ならぬ『きのこ十勇士』の執念が実り大満足の雨中採集会でした。

採集したきのこは、今年も16日から18日まで京都府立植物園で開催している、「第8回きのこ展」会場に持ち込み、67種が同定され即時展示されました。尚不明種は43種ありました。(佐野修治)

観察品リスト

1 *Lepiota acutesquamosa* オニタケ

2 *Macrolepiota procera* カラカサタケ

3 *Amanita abrupta* タマシロオニタケ

4 *Amanita pantherina* テングタケ

5 *Amanita pseudoporphyria* コテングタケモドキ

6 *Amanita fulva* カバイロツルタケ

7 *Amanita vaginata* ツルタケ

8 *Amanita virgineoides* シロオニタケ

9 *Aureoboletus thibetanus* スメリコウジタケ

10 *Boletus reticulatus* ヤマドリタケモドキ

11 *Boletus umbriniporus* コゲチャイロガワリ

12 *Boletus violaceofuscus* ムラサキヤマドリタケ

13 *Pulveroboletus ravenelii* キイロイグチ

14 *Suillus granulatus* チチアワタケ

15 *Suillus luteus* スメリイグチ

16 *Coprinus comatus* ササクレヒトヨタケ

17 *Cortinarius bovinus* サザナミツバフウセンタケ

18 *Cortinarius pseudosalor* スメリササタケ

19 *Cortinarius salor*

ムラサキアブラシメジモドキ

20 *Cortinarius violaceus* ムラサキフウセンタケ

21 *Cortinarius tenuipes* クリフウセンタケ

22 *Paxillus atrotomentosus* ニワタケ

23 *Paxillus cutisii* サケバタケ

24 *Pleurotus pulmonarius* ウスヒラタケ

25 <i>Entoloma murrain</i>	キイボガサタケ	47 <i>Laccaria vinaceoavellanea</i>	カレバキツネタケ
26 <i>Entoloma quadratus</i>	アカイボガサタケ	48 <i>Lepista sordida</i>	コムラサキシメジ
27 <i>Lactarius akahatsu</i>	アカハツ	49 <i>Lyophyllum fumosum</i>	シャカシメジ
28 <i>Lactarius controversus</i>	ケショウシロハツ	50 <i>Marasmius pulcherripes</i>	ハナオチバタケ
29 <i>Lactarius gerardii</i>	クロチチダマシ	51 <i>Mycena haematopoda</i>	チシオタケ
30 <i>Lactarius hatsudake</i>	ハツタケ	52 <i>Oudemansiella radicata</i>	ツエタケ
31 <i>Lactarius subzonarius</i>	ニオイワチチタケ	53 <i>Tricholoma ustale</i>	カキシメジ
32 <i>Russula amoena</i>	ムラサキカスリタケ	54 <i>Xeromphalina campanella</i>	ヒメカバイロタケ
33 <i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ	55 <i>Mycena</i> sp.	クスギタケ属
34 <i>Russula densifolia</i>	クロハツモドキ	56 <i>Clavaria purpurea</i>	ムラサキナギナタタケ
35 <i>Russula lilacea</i>	ウスムラサキハツ	57 <i>Stereopsis burtianum</i>	ハナウロコタケ
36 <i>Russula mariae</i>	ニオイコベニタケ	58 <i>Lenzites betulina</i>	カイガラタケ
37 <i>Russula sanguinea</i>	チシオハツ	59 <i>Trichaptum abietinum</i>	シハイタケ
38 <i>Russula sororia</i>	キチャハツ	60 <i>Leotia lubrica</i> f.	ズキンタケ
39 <i>Lactarius quietus</i>	チヨウジチチタケ	61 <i>Calvatia boninensis</i>	オオノウタケ
40 <i>Austroboletus fusisporus</i>	ヤシャイグチ	62 <i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
41 <i>Heimiella japonica</i>	ベニイグチ	63 <i>Lycoperdon perlatum</i>	ホコリタケ
42 <i>Strobilomyces strobilaceus</i>	オニイグチ	64 <i>Tylopilus nigerrimus</i>	モエギアミアシイグチ
43 <i>Naematoloma fasciculare</i>	ニガクリタケ	65 <i>Lactarius brunnescens</i> ad. int.	モチゲチチタケ
44 <i>Collybia peronata</i>	ワサビカレバタケ	66 <i>Scleroderma verrucosum</i>	ショウロダマシ
45 <i>Gerronema fibula</i>	ヒナノヒガサ	67 <i>Lycoperdon</i> sp.	ホコリタケ属
46 <i>Laccaria bicolor</i>	オオキツネタケ		

関西菌類談話会会報投稿案内

1. 投稿は原則として本会会員に限りませう。
2. 原稿の採否、掲載の順序は編集委員会の決定にお委せ下さい。
3. 編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお委せ下さい。
4. 原稿には表題、著者名、本文の他に必要なら引用文献（あるいは参考文献）をあげて下さい。
5. 別紙に著者名、連絡先、住所、電話番号を書いて添付して下さい。
6. 著者校正は初校だけとし、2日以内に原稿正本とともに速達郵便で返送して下さい。
7. 掲載された原稿はお返しませんが、図・写真に限り著者校正のときにお返しします。
8. 写真製版料実費は著者の負担とします。
9. 原稿は会報編集長宛にお送りください。

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇ かびやきのこに関する記事、図、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇ 図は黒インクで、少し大きめ（刷り上がりの約1.5倍）にお書きください。（ボールペンは不可です）
- ◇ 原稿の分量は400字づめ原稿用紙4～5枚程度としますが、1枚でも半分でも結構です。
- ◇ 写真の掲載を希望される方は、編集委員長におたずねください。
- ◇ 原稿宛て先

〒521-1222 滋賀県神崎郡能登川町大字佐野336-16
関西菌類談話会会報編集委員長

佐々木久雄
TEL. 0748-42-2975

編集委員：岩瀬 剛二、田中 千尋、橋屋 誠、
松本 靖恵、森本 繁雄、佐野 修治、
丸山健一郎 (順不同)

表紙によせて

ウススキスガサタケ *Dictyophora indusiata* Fisch. f. *lutea* kobayasi

あけましておめでとうございます。今年は世紀も新たになりました。これを機に会員の皆様も各々気分を新たにしていってほしいと存じます。

さて表紙の写真に関して。1997年8月、環境庁より野生植物のレッドリスト1726種が発表され、広島の中中国新聞の一面に、サクラソウとウススキスガサタケの大きなカラー写真と共に記事が掲載された。反響は大きく、広島県内の数カ所から、ウススキスガサタケを見たと情報が寄せられた。県内では比較的あちこちで発生しているらしい。写真のものは96年8月末、広島市近郊のスギ林で発見したもの。このスギ林はほとんど日光が入らず高湿で、昨年までは毎年発生していた。今年も気分をかえずに発生してほしい。 山手万知子

謹告

- ・鈴木雄一会員は、2000年7月29日にご逝去されました。
 - ・松川 仁会員は、2000年12月26日にご逝去されました。
- つつしんでおくやみ申し上げます。

編集後記

関西菌類談話会会報23号増刊号をお届けします。会報の編集長をひきうけて以来、まともに計画どおり出せたためしがありません。原稿をどうするかに始まり、校正、編集などなど手間がかかり、会報1号を出すのにこんなに大変なのかとも思います。そして、軽はずみに大役を引き受けてしまった事をいつも後悔しています。でも、会報をきちんと出さないと役を退く事もできなくて、今年も編集長をする事になりそうです。今年を最後と思ってやりますので、今後ご支援、ご協力をお願いします。(佐々木)

関西菌類談話会会報 No. 23 (増刊号)

2000年12月1日 印刷

2000年12月1日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

事務局 〒573-0017 枚方市印田町35-14

TEL. 0720-47-1386

下野 義人

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る